

令和六年度 * 民間園長研修会 *

日時 令和六年十一月二十日～二十一日
会場 ホテルアンビオ松風閣 富士の間

今年度の民間園長研修会は、焼津市のホテルアンビオ松風閣にて実施されました。

【開講式 県保連

土山雅之会長挨拶】

土山会長からの挨拶では、過疎少子化問題について言及し、他県の地域によっては定員割れがより加速し、秋田のある施設では年々十名ずつ五年間で五十名も子どもの預り数が減少している現状があると報告されました。近い未来の静岡県内でも同様の状況が起こる可能性があり、それらに危機感を持って備えなければならぬ時期であることを共有して頂きました。

【講義①】『保育行政の動向について』

静岡県健康福祉部こども未来課長

松本 文氏

静岡県における、次世代育成支援の取組や子育て支援の現状と対策等についてお話をしより進行了し、令和五年は一・二五と令和四年より〇・〇八低下しました。



若年層の結婚に対する意識調査において、将来結婚をしないと思う理由として、「子どもを育てたいと思っていないから。」という項目が女性三位・男性五位にランクインしております。それを裏付けるように、県内の若い世代向けの結婚・子育て等ライフデザイン応援事業の中で、中学生を対象にした講義では、女子中学生から「私は、子どもは要りません。お金が掛かり、自分の時間が無くなるから。」という意見を聞いたそうです。



松本氏は、そのはつきりとした意思表示の言葉にショックを受けながら受け止めつつも、「子育てって素敵だな。楽しいな。」と前向きな気持ちを持ってもらいたいと思うと共に、そのためにはもともと県内の環境を子育てし易く整備していかなければいけないと決意を新たにされたそうです。

その他、保育人材確保・保育環境向上や県内で起こった置き去り事故の対策や、不適切保育防止に向けた取組についてご説明頂きました。

【講義②】『子どもも大人も生き生きと幸せに暮らしていける学校(まち)をつくる』

茅ヶ崎市立香川小学校

山田 剛輔氏

通知表をやめた小学校」として知られている茅ヶ崎市香川小学校の授業実践について山田先生より講義頂きました。

「通知表が子どものため」は本当か。ペーパーテストは信頼性・妥当性・客観性が高いのか。誰かが設定した目標に到達したり有るべき姿にならないといけないのか。それよりも『自分を生きる』ことが大切ではないのか。



では通知表を廃した学校の授業実践とはどのようなものなのか。山田氏の実践理論としては、子どもが生きる文脈上の状況における学びとは、より良い学校や地域を作ることへの貢献する文化的な実践であり、そのため子どもが生きる状況の中に教科の学習内容を埋込むようにデザインしているそうです。

その後、スライドを交え授業実践についていくつもの事例を教えて頂きましたが、ここでは小学校一年生の教室表示プロジェクトについて紹介します。一年生の初旬に、子どもたちの希望により校内探検を実施しました。そこで一年生から、「教室名の表示が漢字のみのため、何が書かれているか分からぬい。」という意見が出ます。それを受けどうしたら一年生でも解る教室表示になるのか。「絵やひらがなのみの表示であればみんなが分かる。」という意見がでて、皆で学校内にはどんな教室の表示名が在ったのかを洗い出

します。そうすると〇〇室というように、必ず語尾が「しつ」で終わることに気が付きます。その流れで、ひらがなの「し」と「つ」が書けて、その前にある〇〇が書ければ、教室表示に必要なひらがなが習得できることに気が付きます。そうしたらまずは皆で「し」と「つ」が書けるようになろうという学習の流れになります。教室の皆はそれぞれ真剣に書き取りをします、旧来の書き取りの授業風景とは全く異なる光景です。一年生でも読める表示名を作れるようになりたいという目的のために一心不乱に取り組めます。書きなさいと言われて書くものとは全く違います。

必要なひらがなを書けるようになった一年生は、休日に保護者にも参加してもらい表示のための木を切る作業を行います。教室表示の文字数と一致する、必要な木の数を数えるのは一年生の役目です。木の数え方にも子どもならではの工夫が見られます。五個の木を一グループにして数える子。教室表示名の文字を紙に書いたものを一枚一枚木の上に乗せて数を合わせていく子ども。主体的に数の数え方を実践で学びます。

そうしてできた教室表示を差し替える為に子どもたちだけで校長先生に許可を取りに行きます。なんで平仮名と絵だけの教室表示を



作っているのか。私たち以降の一年生でも読めるようにという目的をきちんと説明できていたそうです（人にお願いをする、自分の思いを伝える実践）。「いいことをしているね、ありがとう。それを全校に伝えてね。」校長先生の言葉により、今度は表示名をひらがなに替える校内周知のため、動画・チラシ・ポスターを班に分かれ作ることを決め、作成物を掲示する為に保健室・図書室の先生にお願いしに行く。放送室で放送をする。これらの活動を通して、子どもたちが協働し、主体的に色々なことを学び周りの大人たちと関わりながら目的を遂行していく、そしてやり遂げた達成感を皆で味わっている様子が伺えました。その他には、公立学校でもできる、公立学校だからこそできる、と山田先生が仰るように、公立の強みである地域との連携を大切にした素晴らしい教育実践を教えてくださいました。

【講義④】『イーちゃんの白い杖』

〜完成までの道〜

テレビ静岡報道制作局 橋本 真理子氏
最後の講義は、テレビ静岡で長年報道番組に携われた高橋氏による講義でした。報道現場を詳しく紹介すると共に、取材の積み重ねにより制作したドキュメンタリー番組について制作側の視点からお話頂きました。
『こちら用務員室』
では、用務員室が日々



ストレスを抱える子どもたちにとって何でも言えて怒られない憩いの場となっており、唯一学校の開校時から居てずっと学校を見続けてきた用務員さんの視点で教育現場を伝えた作品となっています。用務員さんが子どもとハイタッチして行ってきました、行ってらっしゃいの子どもの挨拶をしたり、ネグレクトで朝食が無い子どもに用務員室でパンを食べさせたり、こういう大人たちの見守る環境により子ども達が支えられていることを理解できました。

『イーちゃんの白い杖』では、高橋さん自身のご家族や会社での体験から感じていた『障害は恥ずかしいことである、可哀そうである』という世の意識を変えたいという想いが強くあつたそうです。障害を抱えるが天真爛漫なイーちゃんを含む小長谷ファミリーを伝えることで、こんなにも私たちに元気と感動を与えてくれるんだということを伝えられたらいいなと仰っていました。長年、イーちゃんに寄り添い、中学校時代のどん底の時期には長谷川さんはイーちゃんから厳しい言葉を掛けられたそうです。それでも、近年ではイーちゃんの結婚を機に明るく前向きになり「見捨てないでいてくれてありがとう」という言葉を放映会でのビデオレターで頂いたそうです。その中で、「私は人を幸せにするために生きてきた。他の人には見える眼があるけど、私には心の眼がある。これからも毎日楽しく生きたい、生きていくことが幸せな社会になればいい」というメッセージを会場に送っていました。